

商業施設を利用する MSM (Men who have Sex with Men) 向け HIV 感染予防プログラムの開発に関する形成的研究

研究協力者：山田創平（京都精華大学/MASH 大阪）、鬼塚哲郎（京都産業大学/MASH 大阪）、
辻宏幸、後藤大輔、鍵田いずみ、内田優（MASH 大阪/財団法人エイズ予防財団）、
町登志雄（MASH 大阪）、塩野徳史（名古屋市立大学看護学部/財団法人エイズ予防
財団）、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

【目的】本研究は大阪地域で MSM 向け HIV/STI 感染対策プログラムを展開している MASH 大阪（NGO）が、MSM が性交渉を目的として利用する商業施設において、より効果的なプログラムを展開するための情報を得るために実施した。【方法】ゲイ・バイセクシュアル男性をはじめとした MSM が性交渉を目的として利用する商業施設は、現在、大阪市内に 25 軒程度存在する。本調査では当該施設利用者 20 名に施設利用時における HIV 感染予防行動と、それに関連する要因についてインタビューを実施した。インタビューは書面による承諾を得た後、録音とメモにより記録された。記録データはテキスト化し、分析された。【結果】当該商業施設におけるコンドームの使用に関しては、利用者が既に「コンドームの重要性に関する情報」を持っており、かつコンドームに対して「強い使用意図」がありながらも、実際のセックスの場面で「相手から不使用を提案」されると、その提案を「受け入れる」という構図が見られた。「不使用の提案」は、HIV ネガティブの文脈では「相手もネガティブである」との理解のもとで「受け入れ」られ、HIV ポジティブの文脈では「相手もポジティブである」という理解の下で「受け入れ」られる。「不使用の提案」はこのように両義的だが、非言語的状況下、とりわけ当人の期待的予期により主観的に解釈され判断される。【考察】分析からは当該商業施設利用者において「コンドームの使用」は「ひとつの決まり事」と理解されてはいるが、未だに「規範」とはなっていない現状が確認できる。「不使用の提案」が「期待」される背景として、コンドームによる「性感の低下」や「扱いにくさ」といった点が表明された。コンドームをサイズや素材で選択できること、品質の高いコンドームやローションを備えること、といった環境の整備が検討される必要がある。

A. 研究目的

MSM に対する HIV 感染対策において商業施設へのアプローチは大きな意味を持つ。

MSM は社会の「同性愛」に対する規範や抑圧により、異性愛中心社会において Hard to Reach Population（把握困難な人口層）となっており、社会においてその存在が顕在化しにくい。そのような状況の中、いわゆる「ゲ

イタウン」に存在する MSM 向け商業施設は、彼らが自らの性的パートナーを得るために必要な場所であり、HIV 感染対策上においても重要なポイントとなる。

「同性愛」に対する規範や抑圧は、主に近代以降に社会的コードとなり都市を中心とした市民社会において普遍化したとされる。そのような中、MSM は“同性愛”に対する社会

的抑圧のために、MSM でありながらも（つまり男性と性交渉を持ちながらも）、「同性愛者」というアイデンティティを社会の中で顕在化させることなく沈潜することとなる。この傾向は様々な社会的運動や、同性愛をめぐる社会情勢の変化などの影響もあり、近年変わりつつあるが、社会的コードそのものは様々な文化や文脈により連綿と構造化されており「同性愛」に対する社会的抑圧にパラダイムシフトが起こるまでには至っていない。

MSM を Hard to Reach Population と定義する理由は、そのような MSM の不可視性による。MSM が社会的に不可視である以上、国や行政が MSM に対して、当事者のニーズを把握することなく予防のメッセージを発しようとするれば、当然「目に見えぬ存在」に対して「教科書的で一般的な情報」を「上から示す」ということにならざるを得ない。もともと受け取る対象が明確に示されていないこのような情報発信が、しっかりと誰かに受け止められることは難しい。

本研究は、大阪地域を中心に MSM 向け HIV 感染対策を展開する MASH 大阪 (NGO) が、MSM が性的パートナーを得るために利用する商業施設である「ハッテン場」において、より効果的な HIV 感染対策プログラムを展開するために実施した。

とりわけハッテン場でのコンドーム使用に関する規範を探ることでコンドーム使用の阻害要因を明らかにし、それにより「ハッテン場におけるセーフターセックス促進環境整備プログラム<ハッテン場プロジェクト~β> (商業系ハッテン場等でのコンドーム普及100%作戦)」において、どのようなコンドームアウトリーチが有効なのかを検討することを目的とした。

B. 研究方法

本調査ではハッテン場利用者 20 名に施設利用時における HIV 感染予防行動と、それに

関連する要因についてインタビューを実施した。調査参加者の属性等は表 1 の通りである。主なインタビュー項目は以下の通りである。

1. 属性 (年齢、職業、性的指向、居住地域) について
2. 普段のセックスについて
3. ハッテン場の利用状況について
4. ハッテン場でのセックスについて
5. ハッテン場でのコンドーム利用状況について
6. HIV 抗体検査行動と予防行動について

インタビューは書面による承諾を得た後、録音とメモにより記録された。記録データはテキスト化し、分析された。テキスト分析に当たっては「M-GTA(修正版グラウンディッド・セオリー・アプローチ) (木下康仁『グラウンディッド・セオリー・アプローチ』2000) と、当該方法論をさらに実用化した「SCQRM (構造構成的質的研究法) (西條剛央『質的研究とは何か』2008) に、マイノリティに関するテキスト分析法として 70 年代以降世界的に用いられている「ポスト構造主義」「社会構築主義」に則った言説分析法 (ミシェル・フーコー『知の考古学』1970) (赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』1999) を併せて用いた。テキストは切片化せずに文脈を損なわずに概念化され、概念間の構造が探索された。

C. 結果

ハッテン場におけるコンドーム使用の阻害要因に関する分析を進める中で、利用者が既に「コンドームの重要性に関する情報」を持っており、かつコンドームに対して「強い使用意図」があることがわかった。だが、実際のセックスの場面で相手から「不使用を提案」された場合、その「不使用の提案」を「拒否する」(結果的にコンドームを使用する)との概念構造がある一方で、その提案を「受け入れる」(結果的にコンドームを使用しない)という概念構造が顕著に見られた。

以上の点から、本研究における分析上の焦点をこの双方の概念構造、すなわち「不使用の提案」を「受け入れる」場合と「拒否する」場合の二つの概念構造を分かちポイントとした。分析の概要は図1の通りである。

その結果「コンドーム不使用の提案」はHIVネガティブの文脈では「相手もネガティブである」との理解のもとで「受け入れ」られ、HIVポジティブの文脈では「相手もポジティブである」という理解の下で「受け入れ」られる、という概念構造が明らかとなった。これらの判断は、ハッテン場という非言語的状況下、とりわけ当人の「期待的予期」により主観的に解釈され判断される。

期待的予期による主観的解釈とは「本当はコンドームを使いたくないが、コミュニティの決まり事として使わなければいけないことになっている。」との意識の中で、「よって<コンドームを使わない>という判断は他者にやってもらいたい。」と感じ、自らは「他者の振る舞いや発言、セックスの環境を含めた状況そのもの、すなわち<他者>や<外部>の中に、<コンドームを使わない>理由や根拠を積極的・主観的に見出そうとする、という状況のことである。

期待的予期の背景には「楽観」や「リアリティ」の欠如が見られた。またそもそも、そのような「期待的予期」が存在する大きな理由に「コンドームの使用による性感の低下」がある。「性感の低下」は「他者との精神的なつながり」といった心理的な諸要因よりも大きく、分析上「コンドーム不使用の最大の要因」として現れる。「性感の低下」には「アナルセックス時にコンドームを使用することで痛みが発生する」あるいは「コンドームを使用することで射精に至らない」といったコンドームの機能上の課題も含まれる。

その結果ハッテン場においてセックスの相手が表象する非言語的な記号性（しぐさや振る舞い、態度）などは、上記のような期待的

予期によって、常に状況的に（当人に都合よく）解釈され理解される。その解釈が予防の観点から客観的に妥当しないことを当人は十分に理解しており、時にその意識が「セックスの後の後悔」や「検査行動」に結びつく。

現実問題として「性感を妨げない」「痛みの生じない」コンドームが容易に想定できない中で、概念構造から浮かび上がってくる「予防プログラム立案上の最大のポイント」は「不使用の提案」がなされる瞬間そのものにある。

ハッテン場においては、コンドームの重要性や予防の重要性、あるいはその方法が脆弱ではあれ規範となって全体化している。その規範は「不使用の提案」が無ければ破られない。<他者>や<外部>による「不使用の提案」がコンドーム不使用のトリガーとなっている点が重要である。「不使用の提案」という他者からのアクションがトリガーとなる背景には、「自らのアクションにより他者に感染を広げたくない」との思いがある。このような思いは、ポジティブであれ、ネガティブであれ広く基盤的に存在している。自らが「HIVネガティブである」との認識がある一方で、「自らのアクションにより他者に感染を広げたくない」という基盤的意識が成立する背景には「日常的にセックスがある以上、HIV以外の性行為感染症も含めて100%ネガティブという現実があり得ない」との意識がみられた。この文脈からは、HIV/STIに対する調査参加者の高い意識が確認できる。

上述のような「自らのアクションにより他者に感染を広げたくない」という基盤的な意識は、コミュニティの規範とも言い得るものである。

D. 考察

「楽観」を「現実」へと引き戻し、HIV感染に対する「リアリティ」を獲得することは容易ではない。それらを実現するプログラムも必要であるし、それらは様々なコミュニテ

イ規範を変えるプログラムによって時間をかけて実現してゆく必要がある。

一方本研究で明らかとなった、言語的であれ、非言語的であれ、〈他者〉や周囲の環境といった〈外部〉に「不使用の提案」を見出し、それがコンドーム不使用のトリガーとなっているというポイントは、セックス現場の環境を変え、メッセージの発信の仕方を変えることによって「コンドーム不使用」が「使用」へと変わる可能性を示唆している。

先にも述べたが、ハッテン場においては、コンドームの重要性や予防の重要性、あるいはコンドームの正しい使用方法が、脆弱ではあれ規範となって全体化している。その規範を破る「提案」は、「期待的予期」によって受け入れられる。

この状況は換言すれば「コンドーム不使用を提案する理由を、常に、しかも他律的に（他者や環境の中に）探している」状況であると言える。「近くにコンドームがない」「相手がコンドームを持っていない」「暗くて見えない」「コンドームを着けると痛い」「コンドームが外れてしまった」といった事柄がコンドーム不使用提案のきっかけとなる。

一度提案されてしまうと、双方に期待的予期があった場合コンドーム不使用へと至る。この場合「コンドームを使わなかった理由・根拠」は常に他者に預託される。「自らのアクションにより他者に感染を広げたくない」という規範が強固である中で、「主体的なコンドーム不使用」は存在せず、不使用は常に〈他者〉や環境など〈外部〉にその原因が預けられる。ここからは、徹底した環境の整備が重要であることがわかる。環境の整備に際してはそもそも「コンドーム不使用を期待」する背景として、コンドームによる「性感の低下」や「扱いにくさ」といった点が表明されることを考慮する必要がある。コンドームをサイズや素材で選択できること、品質の高いコンドームやローションを備えること、といった

環境の整備がすすめられることで、〈他者〉や〈外部〉を通して、コンドーム不使用を正当化するという心理的道筋をずらすことができる可能性がある。いわば「コンドーム不使用を提案する理由が、他者や環境の中に見つからない」状況を実現することが重要であり、この点はハッテン場に対するHIV感染対策プログラムを立案する上で要となろう。

E. 発表論文等

なし

表 1

対象者属性

インタビュー対象者	住所地	年齢	結婚歴	主なハッテン場利用地域	記録方法
Aさん	京都府京都市	23歳	なし	京都・堂山	録音
Bさん	兵庫県西宮市	24歳	なし	堂山	録音
Cさん	大阪府大阪市	28歳	なし	堂山・ミナミ・新世界	録音
Dさん	大阪府吹田市	29歳	なし	堂山・ミナミ・新世界	録音
Eさん	兵庫県神戸市	32歳	なし	堂山	録音
Fさん	兵庫県川西市	26歳	なし	堂山	録音
Gさん	京都府京都市	23歳	なし	京都・堂山	録音
Hさん	大阪府大阪市	24歳	なし	堂山	録音
Iさん	大阪府	22歳	なし	堂山	録音
Jさん	大阪府大阪市	33歳	なし	堂山・ミナミ・新世界	録音
Kさん	大阪府摂津市	25歳	なし	堂山・ミナミ・新世界	録音
Lさん	大阪府泉大津市	24歳	なし	堂山・ミナミ・新世界	録音
Mさん	大阪府大阪市	22歳	婚約中	堂山	録音
Nさん	大阪府大阪市	21歳	なし	堂山	録音
Oさん	大阪府大阪市	31歳	なし	堂山	録音
Pさん	奈良県奈良市	25歳	なし	堂山	録音
Qさん	大阪府大阪市	26歳	なし	堂山	録音
Rさん	大阪府大阪市	35歳	なし	堂山・ミナミ・新世界	録音
Sさん	大阪府大阪市	35歳	なし	堂山・ミナミ・新世界	メモ
Tさん	大阪府大阪市	25歳	なし	堂山	メモ

平均年齢 26.7歳

図 1

ハッテン場でのコンドーム使用に関する概念構成

